



Women's Action

FGM廃絶を支援する女たちの会

Against FGM, Japan



目次

- 巻頭言……………2
- ゼロトレランスと私たち……………3
- 2021年度反FGM基金交付先決定…7
- 寄稿/「ポストコロナル研究入門」のなかのFGM廃絶運動……………10
- 海外 INFORMATION……………13
- 寄稿/FGMにおける神秘のヴェールと沈黙に抗するアートの可能性……………16
- 寄稿/映画『ムクウェゲ「女性にとって世界最悪の場所」で闘う医師』…18
- 学生さんに応えて……………19
- お知らせ……………19

Vol.90

2022年3月31日発行

E-mail: waaf@jca.apc.org URL: <http://www.jca.apc.org/~waaf/>
<https://www.facebook.com/womens.action.against.fgm.japan>



巻頭言

初産を経て想う



こんにちは、スタッフの立園です。私の住む埼玉・熊谷は冬の間冷たく強い風が吹き、震えるほど寒い街なのですが、3月も半ばとなりようやく春めいてきました。近くの荒川沿いの熊谷桜堤で花見をするのがいまから楽しみです。

さて、個人的な話で恐縮ですが、1月末に第1子を出産しました。分娩中やその後の経過には色々と心配事もあったのですが、母子ともに健康に退院することができました。私は都合により無痛分娩を選択したのですが、麻酔を入れる前に形容しがたい陣痛の痛みを感じていた中で、20代の女性が妊娠して1人で出産し、児を遺棄した複数の事件をふと思い出しました。「彼女たちはこの痛みを1人で耐えたのか」と。しかも誰にも妊娠を相談できない辛い時期を経たうえで。私は無痛分娩でも、助産師さんが居てくれなければ乗り切れなかったかも知れないと今でも思うほど、苦しい経験でした。それを1人で耐えたということが児を殺したという事実の免罪符になることはありませんが、ニュースを他人事として聞いて「逃げた男性は非難されないのに彼女ばかり罪が問われてかわいそう」と思うばかりだったのが、彼女たちの心身の痛みになんげ近づいたような気がしました。

同じ経験をしなければ他人の心に寄り添えないということでは勿論ありません。上記のことも、私にもっと想像力があれば自分が経験する前に思い至っていたかも知れません。ただ「想像できる」で終わってしまうのと、感覚を分かち合えると思えるほどまで自分の経験と重ねたり当事者の声を直接聴いたりするのでは、寄り添い方も違って来るなと改めて感じました。そして寄り添い方が変われば、行動も自ずと変わってくることも。いまは情報があふれているのでどうしても知ったつもりになってしまいがちですが、そのものに触れることを忘れずにしていきたいと思います。出産の話に戻ってしまいましたが、私の場合は苦しい経験であると同時にこの上なく大きな喜びでもありました。いま中絶に関する議論が進んできてはいますが、そこから漏れてしまった女性たち、またその児への支援は（最近では内密出産の話がありました）まだまだです。喜ばれる出産・誕生ではないとしても、母子のいのちとこころは守りたい。そのために医療者として自分にできることは何かを考え、実行したいと思っています。



立園裕美

ゼロトレランスと私たち

廃絶運動をめぐる批判とは

WAAF のニュースレター89号に村山千津子さんが『文化』『伝統』で分断されても『苦闘』で連帯する—WAAF 設立当時の思い出』として、『『第一世界による FGM 廃絶運動は自文化中心主義に無自覚な暴力である』といった文化相対主義の立場から、日本における廃絶運動への批判が繰り返された』ことを書いている。25年の時を経て「白人帝国主義による第三世界への文化介入である」という主張はなりをひそめ、現在では FGM が廃絶すべき慣習であるということは世界的なコンセンサスとなっている。

だがその主張がなりをひそめるのと反比例するように今度は研究者たちからの廃絶活動の方法論への批判が声高になっている。その批判されている方法論とは「ゼロトレランス」と「FGM 禁止法」である。研究者たちは FGM 廃絶の必要性を一様に認めてはいるものの、「ゼロトレランス」も「FGM 禁止法」も地域の人々の多様性を無視した国連諸機関からのトップダウンの強硬策であるためにかえって FGM 廃絶という目標につながっていないと主張している。

本稿ではゼロトレランスが当事国でどのように生まれ、どのような意味を持つのか、また廃絶活動を支援する私たち—日本の女性—にとってはどのような意味を持つのかについて考えてみたい。

なお考察に当たっては、30年以上 FGM やジェンダーに基づく暴力の問題に取り組んできたナイジェリア人ジャーナリストのリンダ・オサレンレン (Linda Osarenren/写真 右) さんにメールで「FGM ゼロトレランスの意義」について質問し、ていねいな回答を頂いた。



「ゼロトレランス」はアフリカ発の決意表明

FGM ゼロトレランスという用語は活動するにあたっての方策や方式ではなく、「FGM はどんな形であれ絶対に許さない」という決意の表明であり、目標である。まずこの目標がどのように生まれ、決定されたのかを見ていきたい。

リンダさんによると「何十年も前からアフリカに住むアフリカ人は FGM が有害で廃絶すべき慣習だと認識していた。IAC (The Inter-African Committee on Traditional Practices 伝統的慣習に取り組むインター・アフリカン・コミッティ) の会長であったベルハーネ・ラスウォク (Berhane Ras-Work) さんが 2003 年に開催された IAC 総会にゼロトレランスという目標を掲げることを議題として乗せ、採択された。それを国連諸機関はただちに承認し、行動計画に取り入れた。国連諸機関は今では自分たちがこのプログラムを考え出したかのようにふるまっているが、FGM が女性に対する暴力であり、女性と女兒の人権を侵害するものであると知りぬいている私たち—アフリカ人がこの忌まわしい慣習を終わらせようと最前線に立った」のである。

2003 年 2 月エチオピア・アディスアベバで 3 日間に渡って開催された IAC 総会の最終日にステラ・オバサンジョ (Stella Obasanjyo) ナイジェリア大統領夫人 (当時) が「2 月 6 日を国際 FGM ゼロトレランスデー」とすることを宣言した。オバサンジョ夫人は宣言の冒頭で、1930 年代からアフリカの人々が FGM 廃絶のために費やしてきた多大な尽力を評価した。そして「これまで成し遂げた成果をさらに前進させる段階に来ている。今後は、共通の枠組みにおいて、互いの多様性を尊重しつつさまざまなレベルで活動を強化し、協力して取り組むことになるだろう。この状況を踏まえ、IAC は毎年 2 月 6 日を『FGM ゼロトレランスデー』と宣言することを決定した。ゼロトレランスという新たな取り組みは我々が一丸となって FGM について真摯に向き合い、アフリカにおける性と生殖に関する権利と敵対する文化的・伝統的信条からアフリカ女性を解き放つ決意を新たにさせるだろう」と述べ「国内委員会 (IAC 加盟の 28 か国の委員会) が効果的に働けるように政治的・経済的・社会的環境を支援してほしい」と国際社会に訴えた。

ゼロトレランスという言葉を用いて「地域の多様性を尊重しながら」FGM 廃絶運動をさらに進めていくことを宣言し、国際社会に廃絶運動への協力を訴えたのである。リンダさんの言葉にもオバサンジョ夫人の言葉にもこれがアフリカ発の運動であることの誇りがあふれている。アフリカの人々自身がこのように語っているのにそれを「国連諸機関からの押し付け」であるとするのはそれこそアフリカ人の多様性を無視した傲慢な批判ではないだろうか。

「ゼロトレランス」の意味と意義

ではゼロトレランスという言葉が英語であることについてはどうだろう。

トレランス (Tolerance) は寛容という意味であり、それに Zero をつけることで「寛容度ゼロ」「不寛容」「情状酌量の余地なし」となる。リンダさんにゼロトレランスという言葉が廃絶活動の現場でどのように使うかについて尋ねてみた。

「コミュニティではそれぞれの地域で適切な言葉で使う。『どんな状況のもとでも FGM にノー』『どんな理由があっても FGM にノー』『FGM を終わらせよう』『FGM を止めよう』などという内容を地域の言葉に変えて使う」

この回答から分かるのはゼロトレランスという用語と地域で活動する人々の使う言葉が乖離していないことである。むしろそれぞれの地域の活動家の掲げた目標が先にあり、それを異なる言語が使用されている FGM 実施 28 か国で共有するコードとして採用したのがこの言葉であったと言える。

ゼロトレランス・不寛容とは確かに酷に聞こえる言葉である。だが、例えばユニセフが「児童労働ゼロトレランス」という時にそれが厳しすぎると批判されるだろうか。児童労働は絶対に許さないという方針は世界中でコンセンサスとなっており、多くの国で法律と結びついている。けれどもそれが「強硬策だから児童労働廃絶につながらない」という批判は聞かれない。また「戦争ゼロトレランス (絶対反対)」「核兵器ゼロトレランス (絶対反対)」などにおいても「強硬策だから廃絶につながらない」という批判は聞かれない。

FGM ゼロトレランスも児童ゼロトレランスと同じように「FGM はどんな形であれ絶対に許さない」という強い意志の表明であり、また当事国の多くで FGM 禁止法という法律が採用されている。それなのになぜ FGM ゼロトレランスは廃絶につながらないと批判されるのだろうか。私はここに日本における性暴力の一形態である痴漢の問題との類似を見る。

FGM と「痴漢」の問題に共通するもの

電車やエレベーター、夜道などでの痴漢の被害は深刻で多岐に渡っており、刑法で定められた犯罪である。しかし昔から日本には「痴漢もされない女は魅力が無い」などと痴漢行為を極端に軽くとらえ許容する社会風土がある。一方 FGM も「完全な女性になるために必要不可欠な儀式」だとする固定観念があり、両者の根底にあるのは強固な性的偏見だ。また痴漢が大学入学共通テストという季節的な行事の朝の電車で多発することは FGM がクリスマスシーズンという季節に多く行われることと同じである。

日本の老若の女性たちは誰もが「痴漢は絶対許せない」と感じているが、被害に対してその場で抗議の声をあげにくいのが現実である。抗議の声をあげられないのは女性たちが性被害は被害者の恥であると内面化させられているために、声をあげること無意識のうちにタブー視しているせいではないだろうか。また「女性たちがあまりに自意識過剰であり、被害を強く言い立てるために冤罪を多く生んでいる」という根強い批判を怖れるからでもある。これらは FGM の被害を受ける女性たちが、自分や自分の娘には FGM を受けさせたくないと思っても伝統的な価値観の強い共同体の中で声をあげにくい状況と共通している。

FGM の慣習を持たない日本の私たちがなぜ廃絶運動を支援するのだろうか。それは日本の私たちも文化や伝統の中で様々な性暴力にさらされているという現実から生まれた連帯だ。「先進国日本」の私たちが人道主義的立場から FGM 廃絶を押し付けているのではない。

FGM と日本の痴漢の問題、この二つのケースから見えてくるのは女性が女性への暴力に対してノーと声をあげる時にいろいろな留保をつけられてしまい、肝心の暴力が矮小化されてしまうことではないかと思う。「児童」や「平和」の問題は普遍的な価値を持っているが、女性の人権は普遍的な価値と見なされていないように私には見える。オバサンジョ夫人の宣言にある「ゼロトレランスという新たな取り組みは我々が一丸となって FGM について真摯に向き合い、アフリカにおける性と生殖に関する権利と敵対する文化的・伝統的信条からアフリカ女性を解き放つ決意を新たにさせるだろう」という言葉の FGM を「性暴力」に、アフリカを「日本」に置き換えればそのまま日本の私たちが欲する宣言になる。ゼロトレランスはアフリカと日本の「私たち」のためのものである。アフリカの女性たちにとっては「FGM ゼロトレランス」であり、日本の女性たちにとっては「性暴力ゼロトレランス」である。



最後にリンダさんのこの言葉を紹介しておきたい。

「人類学者たちはどのような文化も擁護したがるが、彼らが完全に忘れてるのは、文化は常に変動するものであるという点だ。文化はすべて人間によって作られ、変わり得るもので、時とともに改善されたり、あるいは破棄されたりするものである。捨て去られた文化・慣習は数多くある」

伊藤充子

2021 年度反 FGM 基金交付先決定のお知らせ

2021年度の反 FGM基金交付先が決定しました。今回も例年通り、過去に最終選考まで残った団体や、信頼のおける推薦人からのリストを参考に候補を絞り込みました。これらの候補団体から改めて申請を募り、反 FGM基金交付検討委員会で話し合った結果、以下の2団体に決まりました。新型コロナウイルス感染拡大の影響で 2020 年度分は募集を取りやめたので、2年ぶりの反 FGM 基金プロジェクトです。おかげさまで今回も皆さまからお寄せいただいた支援金を現地に届けることができました。ありがとうございました。



I) **タンザニア Women Wake Up (WOWAP)**

プロジェクト：シンギダ州で FGM 廃絶を通してジェンダーに基づく暴力に取り組む

プロジェクト実施地域：タンザニア シンギダ州 (Singida Region)

交付金額：3,000 ドル

2014、2015、2016、2017、2018 年度に続き 6 回目。プロジェクト実施地域は、タンザニア中央に位置するシンギダ州のムティンコ区 (Mtinko ward) ムティンコ村 (Mtinko village)。ムティンコ区の人口は 15,985 人 (男性 7,820 人、女性 8,165 人)、ムティンコ村は 6,568 人 (男性 3,177 人、女性 3,481 人)。WOWAP の拠点でもある首都ドドマからムティンコ村までは 266 km 離れている。プロジェクトの目的は、ムティンコ村で人々に FGM 廃絶について啓発することである。

具体的には多くの人々が集まる市場で街頭キャンペーンを展開する。市場は毎月 2 度開かれ、さまざまな物品が販売され、朝から晩まで 1 日中にぎわう。今回はムティンコ村で 4 月、5 月、6 月、7 月にそれぞれ 1 回ずつ 1 日 5～7 時間、ときには音楽を流しながらマイクを通して FGM 廃絶をアピールする。老若男女少なくとも 200 人は集まると想定している。その場にいる人々にも発言してもらうので、地域住民の反応を直接知ることができる。ポスターやリーフレットも制作して、情報を拡散する計画だ。

タンザニアでは 1998 年に FGM が法律で禁止され、政府は 2030 年までに FGM をはじめ女性と子どもに対するあらゆる形態の暴力を根絶すると公約している。2016 年の人口保健調査によると、タンザニア全体の FGM 実施率 (15～49 歳女性) は 10%だが、地域によってかなり差がある。州別で見ると高い順に、マニャラ州 58%、ドドマ州 47%、アルーシャ州 41%、マラ州

32%、シンギダ州 31%となる。これらの州はそれぞれ隣り合っている。最近の傾向として、FGM を受ける年齢が下がってきており（1歳以下が全体の35%）、FGM 禁止法があるため赤ん坊のうちに秘密裏に行われるケースが多くみられる。WOWAP は 1996 年に設立された非政府組織で、ドドマ州に本部を、タンガ州とシンギダ州に支部を置く。その名（Women Wake Up – 女たち目覚めよ）の通り、女性が主導する組織である。

タンザニア連合共和国

面積 94.5 万 km²（日本の約 2.5 倍）、人口 5,800 万人（2019 年：世銀）。ケニア、ウガンダ、ルワンダ、ブルンジ、ザンビア、マラウイ、モザンビークと国境を接し、タンガニーカ湖対岸にはコンゴ民主共和国があり、またインド洋に面する。法律上の首都はドドマだが、実質的な首都機能は経済の中心地となっているダルエスサラームにある。民族は、スクマ、ニャキューサ、ハヤ、チャガ、ザラモ、マコンデなど約 130 で、スワヒリ語（国語）、英語（公用語）が話される。宗教は、イスラム教（約 40%）、キリスト教（約 40%）、土着宗教（約 20%）。新生児死亡率は出生 1000 人あたり 21.7（2016 年）、乳児死亡率は出生 1000 人あたり 31.51（2021 年推定）。妊産婦死亡率は出生 10 万人あたり 524（2017 年推定）。

II) セネガル La Palabre Sénégal（ラ・パラブル・セネガル）

プロジェクト：FGM に関する意識向上および対策

プロジェクト実施地域：セネガル ティエス州（Thiès Region）

交付金額：3,000 ドル

プロジェクトの目的は、FGM が蔓延しているコミュニティにおいて、啓発活動を通じて人々の態度や行動に変化をもたらすことである。さまざまな社会集団に最大限リーチするために、1) ラジオ放送（女性や少女の意識を高めるため FGM に関する番組を放送する）、2) 学校での啓発授業（高校および大学を一校ずつ訪問し 18~23 歳の学生を対象に授業を行う）、3) コミュニティリーダーの意識向上（ダカール・ンバイ・プル村とバンバラ村で宗教や政治分野のリーダーや住民と話し合う）という 3 つの活動を中心に実施する。

活動 2)、3) を通じて、150 人（高校生 50 人、大学生 50 人、コミュニティリーダーなど 50 人）ほどの意識改革を行うことができる。活動 1) の受益者数を測定することは困難だが、このラジオ番組が地域で 500 人以上の人々に向けて放送されることを考えると、その直接的間接的な影響力の大きさを期待できる。参加者の反応とアンケート回答から、効果や成果を評価する。また、関連機関やコミュニティと連絡を取り合い、長期的なフォロー

アップを行う。

ティエス州では、10歳までにFGMを受けた女性が過半数を占め、そのうち約4分の3（72.2%）は5歳までに受けていると言われている。15～49歳の女性の50%以上が「肉を切除する」タイプのFGMを受けており、持続的な痛みなどの問題が生じている。ほぼすべてのFGMは、コミュニティの儀式の一環として「伝統的な切除者」によって行われている。セネガルでは現在、女性の80.1%、男性の79.7%がFGMの継続に反対しており、特に1999年制定の反FGM法の影響でその廃止が支持されているが、人口の約20%が依然としてFGMを実施している。

ラ・パラブル・セネガルは、社会的弱者、特に女性や子どもたちを支援することを目的とし2006年に設立された。現在は、教育（子どもの就学支援）、青少年の育成、人権擁護のための住民啓発を中心に活動している。性暴力（FGM、児童婚、強制結婚、名誉のための暴力）の被害者を保護し、社会復帰のための安全な住居を提供している。代表者のキャディ・コイタは自身の著書『切除されて』（2007年）の邦訳刊行を機に来日し、WAAF主催で講演会を行っている（NL44号に関連記事掲載）。La Palabre（ラ・パラブル）とはフランス語で「長談義」を意味し、村の広場で大きな木の下に人々が集まり、座って議論する様子が由来となっている。



セネガル共和国

197,161 平方キロメートル（日本の約半分）、人口 1,674 万人（2020 年：世銀）。アフリカ大陸最西端に位置し、北東にモーリタニア、東にマリ、南東にギニア、南にギニアビサウ、さらにガンビアと国境を接している。首都はダカール。民族は、ウォロフ、プル、セレール、トゥクロール、ジョラ、マンディンカなどで、フランス語（公用語）やウォロフ語など各民族語が話される。宗教はイスラム教（95.9%）、キリスト教、伝統的宗教。新生児死亡率は出生 1000 人あたり 20.6（2016 年）、乳児死亡率は出生 1000 人あたり 47.72（2021 年推定）。妊産婦死亡率は出生 10 万人あたり 315（2017 年推定）。

国情報出典：

外務省「国・地域」（<https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/tanzania/data.html#section1>）
（<https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/senegal/data.html#01>）

The World Factbook（<https://www.cia.gov/the-world-factbook/countries/Tanzania/#people-and-society>）

世界の新生児死亡率国別順位 – WHO 2018 年版

（https://memorva.jp/ranking/unfpa/who_whs_neonatal_mortality_rate.php）

「ポストコロナ研究入門」のなかの FGM 廃絶運動

— 学生たちの受容と省察

荒木和華子

新潟県立大学国際地域学部の比較文化コースには展開科目（選択科目）で、6名の教員が担当するオムニバス授業に「ポストコロナ研究入門」があり、毎年一学年の人数を軽く超える200名近くの学生たちが受講している。

私は3回分の担当回のうち、1回目にポストコロナ研究の祖であるファンソン、そしてサイドやスピヴァクを紹介しポストコロナ研究の導入をおこなった上で、2回目にヤンソン柳沢由実子さんによる貴重なご講演動画「わたしはなぜ日本で FGM 廃絶運動を始めたか」を視聴し、3回目に FGM をめぐる多様な立場からのアカデミックな議論を解説している。

昨年11月に、この授業のテキストとして作成した『帝国のヴェール：人種・ジェンダー・ポストコロナリズムから解く世界』（明石書店）が発行されたため、学生たちは合わせて、コラム「ポストコロナ研究の可能性—歴史学からの解説」（渡辺賢一郎著）と7章「FGM 廃絶をめぐる歴史プロセスと新たなアプローチの可能性—『母たちの村』とナイス・レンゲテによる「男制」への着目」（土屋・荒木共著）を読み、以下のような感想を述べた（下線は荒木による）。

「自分自身 FGM に関する話を聴くのはこの講義で聞くのが初めてだった。それこそがまさに問題だと感じている。多くの女性を苦しめてきて、国連でも取り上げられている問題を今まで知らなかったため、考えたことがなかった。」

「FGM が長年にわたって形成されてきた文化の一部である面もあるかもしれませんが、そもそも文化は移り変わるものでありますし、個々の人権が重視される現代において、これ以上犠牲者を増やさないために、時代にそぐわない習慣は淘汰されてゆくべきであると私は考えます。」

「宗教や文化、伝統に対して、思考停止してしまうことが FGM 廃絶を困難にしている原因であると考えた。（略）これらは誰からも干渉を許さない一種の硬い鎧である。」

「沈黙し、傍観していることは、この問題を継続させ続けている加害者に変わりない。そのため、当事者でない立場である私たちができることは、まず、第三者や傍観者という立場から脱することだと思った。」

「人工中絶などと同じように FGM は私たちにとって関係のない話ではなく、女性の権利を守るために考えていかなければならない問題なのだと思います。(略) ヤンソン柳沢さんは翻訳を通して FGM 廃絶に尽力なさっています。私たちも SNS を通じて意見を発信することで FGM 廃絶に少しでも力になれるのではないかと思います。」

「私は講義を受け、FGM 廃絶に向けて男性を含むそれに反対しようとするすべての人々が、そして何よりも私自身が問題について学び、声をあげる必要があると考えた。なぜなら、ジェンダーに対する理解が広がる現代では男性の活動協力が不可欠であり、男性中心の社会制度に対して闘うという点では、女性・男性という垣根は存在しないからである。(略) 私は被害に遭う女性たちと共通の性を有する一人の人間として行動することが重要であると考えた。当事者と繋がっているという意識を持つことでより FGM 廃絶に向けた強い気持ちを有することが可能であり、それを活動にも反映できるからだ。」

感想の紹介数が多くなってしまったが、これらは実は紹介したいと思ったなかのほんの一部である。学生たちは、WAAF 創設者であり日本での FGM 廃絶運動のパイオニアであるヤンソン柳沢由実子さんの語りから多くを学び、講義が訴えている内容は自分の問題でもあると認識していることがわかる。そしてこれまでの FGM 廃絶運動家たちのメッセージを確かに受け止めて、日本に暮らす若者としてこの問題に対して何ができるのかについて真剣に考えるきっかけとしたようである。

FGM 廃絶の動きに対してアカデミックな批判を展開してきた、文化人類学者やポストコロニアル研究者の主張についても学び、一筋縄ではいかない問題の複雑性と運動の困難な歴史についても理解した上で、これらの感想を綴った。

『帝国のヴェール』内の「はじめに」でも述べたのだが、アメリカの BLM 運動（ブラック・ライヴズ・マター運動）が提示したのは、特定の（人種の）人の命を奪う暴力が警察等の社会システムによって正当化されている現状に抗うために、連帯して声をあげようという、暴力への応答と

しての一つの倫理の形であった。ここで非難されているのは、白人個人ではなく、白人至上主義によって成り立っている社会的システムである。同様に、FGM についても、男性 vs. 女性、あるいは地域住民 vs. 植民地官吏の問題に帰結させず、(7 章の拙稿のなかで、宮地尚子さんの「男制」(= 男性中心主義による社会システム) 概念を借用したのだが)、個人が簡単には太刀打ちできない巨大なパワーである社会システムの問題であると捉えた方がよいのではないか。次の学生の感想がこの点をよくまとめていると思うので、再び紹介したい。

「最初に声を上げたのは当事者であるアフリカの女性たちであったとヤンソン柳沢さんは語った。「男制」社会の中で搾取され続け、助けを求める声を出すことすら許されなかった人々の主張を「外部が介入すべきではない」と反対することは、むしろ植民地主義の加害者側に立つことを意味するように感じられた。問題視されるべきは FGM だけでなくアリス・ウォーカーが失明に至った経緯から読み取れるような日常生活での女性の社会的立ち位置も同様である。男性中心的な考え方やシステムが普遍化しているために犠牲になる人、その根本的な原因が社会システムというあまりにも巨大なものであるために救われなかった人、そういった人々の言葉を聴くことが、今後同じような境遇の人を生まないようにするためのきっかけとなるのではないかと考えた。」

おそらくさらにむずかしいのは、FGM 問題の本当の敵が「システム」であることだけではなく、焦点となるのが「女性性器」という「ヴェール」の内側に隠すことが望ましいとされがちな対象であるという点にもあるように思われる。本号の土屋さんによる寄稿においても、FGM の問題を美しい花によって隠すという芸術表現にそのような心象が物語られている。アカデミックな現場における筆者個人の経験となるが、この問題を題材に取り上げようとしたら、組織から「タブーであるから」遠慮するようすすめられ、応じなかったところ最終的にトップから却下の判断が下されたという経験をしたこともある。つい数年前のことである。

しかし、悲観しなくてもよいのかもしれない。フランスのフェミニズム哲学者・政治家ジュヌヴィエーヴ・フレスの新刊『同意——女性解放の思想の系譜をたどって』(明石書店)においても、文化人類学の主張が対比させられ、これまでの FGM 廃絶の議論に現在結論が出ているとされている。本書のなかで FGM に関する記載量は多くはないが、FGM 廃絶の「告発に対して

もはや異議が唱えられなくなったことは喜ばしい。女性器切除という、セクショナリティと結びついた慣習の利点と危険をめぐる 1980 年代からの論争は、ようやく幕を閉じた」(128-130 頁) と述べられているのである。

*ポストコロニアルは、英語の post と colonial からなり、ポストは「~のあと」という意味の接頭辞です。よって、「植民地後の」と表記されたり、理解される場合もありますが、批評理論や歴史研究においては「脱一植民地主義のための」、「反植民地化の」など抵抗の思想を含む概念として意識されることが多いです。これは、コロニアルの意である(被)植民地的状況を認識し、そこから脱するため、乗り越えるために何ができるのかについて、模索し、思考する運動としての学問領域において使用される用語であることも一因といえます。(参考: 拙稿「ポストコロニアル」『国際地域学入門』(勉誠出版、2016年))



WAAF ブログ・フェイスブック掲載記事に加筆

エジプトー減少しない FGM

<2022年3月8日 Deutsche Welle (DW)>

エジプトでは 2008 年に FGM は違法となり、実施者や家族にも厳しい罰則が科せられている。政府は 2030 年までに FGM をなくすと明言している。しかし、カイロの Tadwein Center for Gender Studies による新たな調査では、18~35 歳女性の 86% が FGM を受けていることが判明した。FGM を支持する女性の数は減っているものの、実施率は 2014 年の調査で示された数値とほとんど変わらない。

エジプトでは医療機関が FGM を行うケースが目立つ(「FGM の医療化」)。「FGM には医学的根拠がある」と話す医師もいる。反 FGM 活動家の Mona Eltahawy はそれに真っ向から反論する。Eltahawy によると、母親は娘が社会から排除されないようにと娘のためを思って FGM を受けさせる。今回の調査では「息子が FGM を受けていない女性と結婚することを許さない」と回答した人の割合が 30% だった。男性優位社会の中であって、女性がからだの自己決定権を勝ち得ない限り FGM はなくならないと Eltahawy は指摘する。

<https://www.dw.com/en/despite-progress-elsewhere-egypts-fgm-numbers-still-high/a-61042948>

10 ドルラジオやバイクタクシーで FGM 廃絶

<2022 年 2 月 16 日 The Guardian>

『ガーディアン』紙が始めた「FGM 廃絶に向けたグローバルメディアキャンペーン (GMC)」は、アフリカ現地のテレビ・ラジオを通じた活動を支援している。300 ドルから 500 ドルほどの資金支援でも十分に効果が上がっているという。

ナイジェリア南部の村に住む Ayodeji Bella も GMC が支援する活動家の一人だ。地方局のテレビで FGM の問題を訴えると、以前は耳を貸さなかった地域の指導者たちが Bella に FGM 廃絶について意見を求めるようになった。その結果、彼女の活動する一地域では 3 年で FGM がなくなった。

ソマリアの活動家 Ifrah Ahmed は正しい情報を届けようと、10 ドルのラジオ送信機を国内避難民キャンプで配っている。縫合タイプの FGM による影響で出産時に母親も赤ちゃんも亡くなるケースがある。Ahmed は現在、難産の場合は病院に行くよう求める医師や助産師の話をラジオで流しており、人々の意識変化が感じられるという。

こうした成果を見て、多額の資金を提供している組織も草の根活動に安心して直接資金を投入できると考えるようになってきた。FGM を 2030 年までに廃絶するには 24 億ドルが必要だという試算がある。国連のプログラムコーディネーター Mireille Tushiminina は、地域の活動家に直接資金を届けることが今や肝要だと話す。特に若者は慣習を破ることを恐れず、社会に革新をもたらす存在だと指摘する。

新型コロナウイルス感染拡大は FGM 廃絶運動にも打撃を与えているが、これを好機として活動してる人々もいる。ギニアではロックダウンの間、バイクタクシーのドライバーたちが FGM など女性に対する暴力を監視する役目を果たしている。500 人の若い男性ドライバーたちが反 FGM のメッセージを拡散する活動が続けられているという。

<https://www.theguardian.com/global-development/2022/feb/16/how-10-radios-and-taxi-bikes-are-helping-to-end-the-mutilation-of-girls-fgm>

2月6日は国際 FGM ゼロトレランスデー

<2022年2月3日 UN News>

新型コロナウイルス感染症のパンデミック（世界的な大流行）で、何十年にもわたる FGM 根絶に向けた国際的な取り組みが後退する可能性がある。2月6日の国際 FGM ゼロトレランスデーを前に国連機関が警鐘を鳴らしている。

UNICEF によると、この状況では 2030 年までにさらに 200 万人の少女が FGM の犠牲になる可能性がある。FGM はアフリカや中東 30 か国だけでなく、アジアや中南米の一部、また西ヨーロッパ、北米、オーストラリア、ニュージーランドの移民社会で行われている。ジブチ、ギニア、マリ、ソマリアといった国々では、少女のほぼ9割が FGM を受けていると報告されている。

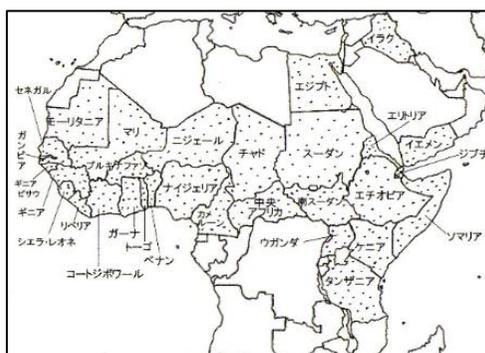
WHO が指摘するのは「FGM の医療化」の傾向だ。FGM を受ける少女のうち約4人に1人（5200万人）は医療従事者の手によって切除されているという。

<https://news.un.org/en/story/2022/02/1111>

シエラレオネーFGMにより女性が死亡

<2021年12月31日 The Guardian>

21歳の Maseray Sei は、女性だけの秘密結社「ボンド・ソサエティ」で FGM を受けた後に亡くなった。Maseray は幼い息子二人を持つ若い母親だ。二人目の子どもを出産した後、「FGM を受けよ」という周囲からの圧力が増し、自ら「ボンド・ソサエティ」に入ったという。そこでは FGM が成人儀礼として行われている。警察は切除を行った長老の女性たち（ソウェイ）を逮捕した。



アフリカ・中東 FGM 実施国/UNICEF(2013年)を元に作成

シエラレオネにおける FGM 実施率は 90% と極めて高く、FGM を禁止する法律もない。FGM を支持する政治家もいる。FGM による被害のほとんどは公にならないという。事件を受けて、FGM 廃絶を求める活動家たちは FGM 支持派の政治家たちを強く非難し、少女や女性をこのように危険な目に合わせる者たちをすべて起訴するよう政府に訴えている。

<https://www.theguardian.com/global-development/2021/dec/31/death-of-young-woman-after-fgm-revives-calls-for-ban-in-sierra-leone>

FGM における神秘のヴェールと沈黙に抗するアートの可能性 —芸術・人権活動家オワントの展示“Flowers”—

土屋 匠平

「女性の身体、何か神秘のヴェール、何か話してはいけない約束事のようなものがある」。この言葉は 2020 年度に開催された WAAF オンライン勉強会でのヤンソン柳沢さんの応答（講演後に質問した筆者に対する）の一部である。「神秘のヴェール」によって、問題の本質が不可視にされ、聴かれるべき声が聴かれない。より厄介なのはそのようなヴェールの存在そのものに自覚的になることが容易ではないことである。

筆者は新潟県立大学国際地域学部を卒業し、現在一橋大学大学院社会学研究科地球社会専攻に在籍し、人種・ジェンダー史を勉強しているが、学部時から FGM 問題に関心を持ち、本誌から多くを学ばせていただいていた。本稿では FGM における沈黙と、それに抗するアートの可能性を考察したい。オワント（Owanto、) はガボン共和国出身の学際的な芸術家、人権活動家である。彼女の作品から、FGM における沈黙と FGM 廃絶におけるアートの可能性を考えたい。

オワントは “Flowers” というタイトルのアートを通して FGM 廃絶を世界中に訴えている。彼女は、2015 年に亡くなった父親の持ち物のなかに、植民地時代の 1940 年代に西洋の写真家によって盗撮されたと思われる FGM の儀式の白黒の少女の写真を発見し



【図①:オワント】

た。当時オワントは写真を直視できないほどのひどいショックを受け、嫌悪感を抱き、見たことをすべて忘れたいと思ったという。しかしオワントは FGM がいまなお続く問題であることを世界に伝えるために、国際女性デーに合わせて、2020 年にドイツのフランクフルト・アム・マインのアートギャラリー Sakhile&Me で、2021 年にはパリ北部のサン＝ドニにあるポール・エリュアール美術歴史博物館で FGM を題材としたアートの展示を行った。

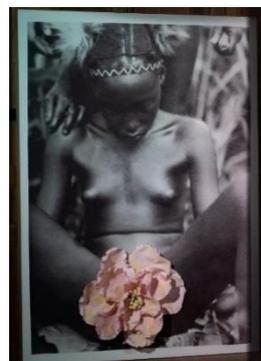
作品では「花」が特徴的に扱われており、モチーフになっているのは薔薇であるが、女兒たちのアイデンティティを覆い隠す象徴として用いられている。手作業で作られた磁器でできた繊細な花は非常に美しい。一方で、FGM に伴う女兒・女性たちの苦しみが、美しい花のように「神秘のヴェー

ル」によって隠されている皮肉をも彼女は表現している。FGM の施術によって、子どもから大人へと移行したとされる女性たちは男性たちに貞節、純潔であるとみなされ、男性に婚約者として選んでもらえるようになる。さらに FGM によって美しくなると社会で認識されることもあるそうだ。女性たちは、貞節、純潔、美しさの名のもとに FGM を受けさせられ、FGM について、自分の身体について沈黙させられる。いうまでもなく女性たちに貞節や純潔が求められる背景には、家父長制社会という構造の存在がある。施術による痛みや後遺症による苦しみの実態は、女性としての美しさのヴェールのもとに、隠蔽され、忘却されているのではないか。オワントの作品における花はそうした FGM の側面を描いており、見る者は「ヴェール」の存在に気づくことになる。



図②: Flowers VII (Ladybird)

また、展示のウェブサイトには「過去を現在に引き寄せて、重要な対話を始めたい」と記されている。オワントは、偶然見つけた過去の写真を、忘れられてしまわぬよう拡大し、大きな花を添えて、写真の女子に「語る」ことにしたのである。インタビューで彼女は図③の作品について、「彼女はまさに話そうとしている。話すことは声を必ずしも必要としない」と述べた。



図③: Flowers II (jeune fille à la fleur)

さらにオワントは、女兒に対する暴力を止めなくてはならないというメッセージを伝えたいと思う一方で、彼女が初めて写真を見たときに直視できなかったように、FGM の残酷さをダイレクトに表現したくなかったという。そこで、図③のように彼女は花を用いることによって、センシティブとされる部分を「隠す」ことで展示を可能にし、見ることですら胸が苦しくなるものに人びとが正面から向き合うことを可能にした。もちろん、切除された部分の血液や痛々しさを花で覆うことで、女兒たちの肉体的、精神的な痛みへの共感を難しくし、現実から目をそらしてしまう可能性があることを彼女は理解している。しかし彼女によれば、アートを使うことで衝撃を和らげることができ、同時により多くの人びとに強力なメッセージを伝えることが可能となる。

オワントは、美術館に対話を持ち込むことは重要であり、美術館には、人びとが「聴く」ことを手助けし、文化を変えるための対話の場に人びとをい

ざなう役割と義務があると考えている。FGM 廃絶にむけて、当該地域に暮らさない人びとが FGM について知ることは重要なのではないかと筆者も考える。一方で、センシティブであるために直接的な表現を「隠す」ことが好まれるように、FGM に正面から向き合うことは簡単ではない。男性であればなおさらである。しかし、今も苦しんでいるのにも拘わらず、その苦しみを隠蔽され、沈黙させられている人びとを置き去りにしてよいのか。当該地域以外の人たちが FGM 廃絶運動に取り組むことは重要であり、まずは FGM を知るといことが何よりも大切であると思う。「沈黙は共犯」とムクウェゲ医師が言うように、FGM 廃絶運動の波を横に広げ、FGM をめぐる沈黙を打破するきっかけの一つとして、アートの持つ可能性に注目していく意義はあるのではないだろうか。

参考資料

Ollia Horton, "Gabonese artist uses flower power to tackle horrors of female genital mutilation", RFI, <https://www.rfi.fr/en/culture/20211027-gabonese-artist-uses-flower-power-to-tackle-horrors-of-fgm-female-genital-mutilation-colonialism-africa-women-education>

(2022. 3/10 アクセス)

Sakhile&Me, "Owanto Flowers", <https://www.sakhileandme.com/exhibitions/owanto-flowers-2020.htm>

(2022. 3/10 アクセス)

荒木和華子、福本圭介編、『帝国のヴェール』、明石書店（2021）

図①出典：<https://www.sakhileandme.com/exhibitions/owanto-flowers-2020.htm>

図②出典：<https://www.sakhileandme.com/exhibitions/owanto-flowers-2020.htm>

図③出典：<https://www.rfi.fr/en/culture/20211027-gabonese-artist-uses-flower-power-to-tackle-horrors-of-fgm-female-genital-mutilation-colonialism-africa-women-education>



会員寄稿

映画『ムクウェゲ「女性にとって世界最悪の場所」で闘う医師』

齊藤 栄子

WAAF 通信（メールマガジン）でこの映画を紹介され、観に行ってきた。

この映画を観るまで私はレイプとは性的欲望・快樂のためのものだと思っていた。だが、それは人を恐怖に陥れ服従させるための武器であると知った。コンゴ民主共和国ではルワンダから豊富なレアメタルや錫などの鉱物を奪うために武装勢力が侵攻している。そして力を見せつけ、支配するためにレイプが行われている。

女性は語る。「8歳でレイプされ次々と男が変わり女性器が損傷され内蔵までも飛び出す被害を受けた。ムクウェゲ医師に8回の手術をうけてやっと回復した」。別の女性は語る。「母は椅子に縛られて頭を鉋で割られた。母の血が流れるところへ首を切られた父が倒れてきた」

男は語る。「武装勢力の隊員にならねば自分が殺される。最初の任務は麻薬を飲まされレイプする事で、200人ほどやった。女性器に武器を入れてレイプ

したら死んだ」

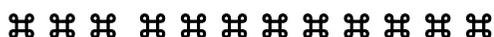
女も被害者で男も被害者というこの事実に戦慄が走る。

ノーベル平和賞受賞者のムクウェゲ医師は傷ついた女性器や内臓をまず治療する。回復後、精神面をサポートしつつ、職業訓練で自立を目指し、レイプを告発し法律で罰する制度の実現を目指している。

ムクウェゲ医師は言う。スマホに使われているレアメタルの殆どはコンゴで採掘されている。だからコンゴのレイプは世界中の人にかかわる問題である。スマホを使うときコンゴのレイプの実態を想像し、理解してほしい。そして、「私が命を狙われる危険をおして活動を続ける事ができるのは治療を受けた女性たちの明るく、強く生きようとする姿に励まされるからである」と話す。

平日に8割ほどの観客。若い女性や男性の姿が多かったことに前進する希望を感じた。

学生さんへ



これまでも時折ご依頼に応じて中・高・大学生に FGM を巡る情報をお伝えしていますが、昨夏は大学生から卒論のために、昨秋と本年1月には高校生から授業の一環ということで協力を求めるメールが届きました。様々な社会問題がある中、FGM に着目していただいたことを頼もしく思い、スタッフがこれに対応しました。

卒論のためにという大学生とはオンライン形式でお話しする場も設けました。ここで当会に求められたのはスタッフの活動に関する意識調査で、回答はメールでお送りしました。この卒論を翌年になってから送って下さいました。該当部分は細かく客観的に分析されており、幾分かでもお役に立てた気がします。

高校生（東京/男女4人・大坂/女1人）から舞い込んだ FGM に関するインタビュー依頼に対してもメールで回答しました。両者のインタビュー内容には自分たち学生が反 FGM ということで何が出来るか、何をしたらいいかというものがあり、問題を主体的にとらえ変革を志向する前向きさを感じました。後日、送られてきたお礼状の中に「ネットだけでは知ることのできなかつた様々なことを知ることができた」とあり、やり取りの意義を感じました。

今後ともこうしたつながりを大切に、FGM を今日の問題として伝え、女性、女兒を巡る差別、暴力の問題にも目を転じていただけたらと思います。

総会開催のお知らせ



2022 年度の定例総会を 6 月に予定しております。新型コロナの感染状況などを勘案しまして、後日改めて総会開催についてご案内申し上げます。



2021年4月1日～2022年3月31日までの会費・カンパ・反FGM基金

会費・・・一般会員73名、学生会員1名、2団体会員より頂いています。

カンパ・・・24名より65,000円をお寄せ頂きました。

反FGM基金・・・39名から1,220,000円をお寄せ頂きました。

※2022年度会費納入用郵便払込票を同封いたしました。尚、既にお振込みいただいている場合はご容赦ください。



反FGM基金への募金のお願い

反FGM基金（英語名：WAAF Fund）は、FGM廃絶のために活動している当事国団体に資金支援を行うためにWAAFが1997年に創設した基金です。会員だけでなく広く一般に募金を呼びかけています。寄せられたお金は全て当事国の活動に使われます。交付先は「反FGM基金交付検討委員会」にて決定し、基金の運営については年次総会で報告します。これまでギニア、ケニア、カメルーン、セネガル、ナイジェリア、ブルキナファソ、タンザニア、スーダン、ガーナ、ウガンダ、ソマリランド、エジプト、シエラレオネ、リベリア、エチオピア等のNGOへ資金支援を実施してきました。皆様のご賛同をどうぞお願いいたします。



◆反FGM基金の振込先 郵便振替：00190-2-355679

口座名：FGM廃絶を支援する女たちの会

FGM(女性性器切除)廃絶運動を支援してください

FGMとはFemale Genital Mutilation（女性性器切除）の頭文字をとった略語で、女性外性器の一部あるいは全部を切除し、ときには切除してから外性器を縫合してしまう施術です。国連機関の発表によれば2022年現在、アフリカをはじめとして世界30か国以上で2億人以上の女兒・女性がこの慣習の犠牲になっていると推測されます。

FGM廃絶を支援する女たちの会（WAAF:ワーフ）は、FGMが女性の健康を阻害する有害な慣習であり女性の人権の侵害であると考え、FGM廃絶のために立ち上がったアフリカの人々を支持しています。この慣習の廃絶をめざして運動しているアフリカの人々に支援を送り続けたいと願い、活動しています。

◆年会費 個人会員3千円（学生会員2千円）/ 団体会員1万円

◆会費振込先 郵便振替：00170-8-580948

口座名：FGM廃絶を支援する女たちの会

編集後記 本号で土屋匠平さんが紹介されている写真アートを通しての反FGMは如何でしたか。斉藤栄子さんがコメントされている映画の監督は女性で、その卑劣な暴力に多くの目が向けられることを願っています。2月には1986年に深刻な原発事故が起きたウクライナで戦争が勃発し、破壊された街や被害者の映像がこれまでの他の武力紛争に比べ大量に流されています。子どもを失った、逃げ場がないと悲嘆する女性の姿に涙を誘われ、怒りもわいてきます。WAAFはロシアの軍力行使に反対し非難する声明をSNSを通じて出しました。大きな力を持つ者たちの勢力争い、縄張り争いに、平穏な生活を望む市民が否応なく巻き込まれてしまうことを思い、そうさせない努力が大事だと思います。ようやく個々の人権や共存を優先するシステムを地球規模で築こうという動きが国連のSDGs（ターゲットの一つにFGMも）にも見られ、実現が期待できそうなこの時期にと思います。(YH)

☆掲載記事の無断使用は固くお断りします。 ©2022 WAAF Printed in Japan ☆